

文化三、四年の京伝、馬琴と『桜姫全伝曙草紙』

大 高 洋 司

要 旨 山東京伝、曲亭馬琴の諸作の相互関係を中心に（稗史もの）読本の形成過程を跡づけようとする際に、文化三、四年（一八〇六〜七）刊行の作については、従来はかばかしい説明がなされて来なかつた。本稿では、まず、そこに至る京伝、馬琴の読本二七作の素材について、各作品の構成・趣向・主題にとつての重要性を再検討し、新たな基準で分類を施して一覧表として提示した上で、この時期京伝、馬琴が共に目指した方向が最も高いレベルで結実したのは、京伝『桜姫全伝曙草紙』（文化二・一二刊）であると結論づけた。また、これによって、京伝、馬琴は文化四年まで兄弟作者であるという稿者の仮説を一步進めた。

山東京伝、曲亭馬琴の諸作の相互関係を辿りながら、〈稗史もの〉読本の形成過程を跡づける作業を重ねていると、『忠臣水滸伝』（京伝 前編寛政一・一・一一、後編享和元・一一）から文化二年（一八〇六）年までと、文化五年（一八〇八）以降は、比較的展望が立ちやすいのに対して、文化三、四年（一八〇六、七）の刊行作については、関係の把握が非常に難しい。この兩年の二人の読本には、類似する素材や趣向が頻出する一方で、作品の内実から感じ取れる印象は、かなり異なっているのである。その矛盾の在りかについては、長い間五里霧中であつたが、近年やっと理解が及ぶようになり、いくつかの拙稿をまとめるに至つた。⁽¹⁾本稿では、それらの成果を援用しながら、結論めいたものを提示してみたいと思う。前もつて一言すれば、文化三、四年の京伝、馬琴において、『桜姫全伝曙草紙』（京伝 文化二年一二月刊）が最も重要な作と見なされているのではないか、ということである。

まず、次の一覧表をご覧いただきたい。これは、文化三、四年以前に刊行された二人の読本二七点について、I 〈稗史もの〉・II 〈中本もの〉・III 〈絵本もの〉に分類し、I・IIのうち、〈読本的枠組〉形成以後のものについては、さらに〈仇討もの〉・〈伝説もの〉等の下位分類を施した上に、○印をつけて、主立った典拠ないしは素材と考えられる作品、ないしは説話を列挙したものである。典拠ないし素材の選定に際しては、〈稗史もの〉読本については『山東京伝全集』・『馬琴中編読本集成』の徳田武氏解題、〈中本もの〉読本については高木元氏『江戸読本の研究』の記述にまとめられたものを中心に、多くの先学の指摘を参照しているが、それぞれの作品の構成・趣向・主題にとつて、必要不可欠な役割を果たしていると、私意によって判断したものを掲載している。そのうち、私の調査不足等もあつ

て、現段階で推定に止めるものについては、へくで示してある。

〈稗史もの〉形成期における京伝、馬琴読本―分類と主要典拠―

I 〈稗史もの〉読本

- 1 『忠臣水滸伝』(京伝 前編寛政二・一・一一、後編享和元・一一)
○『通俗忠義水滸伝』(中国白話小説、通俗本)・『忠義水滸伝』第一〜十回(同、和刻本)・『仮名手本忠臣蔵』(浄瑠璃本)
- 2 『復讐奇談安積沼』(京伝 享和三・一一 仇討もの)
○江戸巷談(こはだ(小幡・小鱈)小平次譚)・『忠義水滸伝』第五回(中国白話小説、和刻本 前出)・『通俗孝肅伝』卷之二「阿弥陀仏講和」(中国白話小説、通俗本)・『根無草後編』二二之卷(談義本)・『兩月物語』卷之三「吉備津の釜」(初期読本)
- 3 『優曇華物語』(京伝 文化元・一一 仇討もの)
○『通俗孝肅伝』卷之五「石獅子」(通俗本 前出)・『奥州安達原』(浄瑠璃本)・『風流曲三味線』卷二二(浮世草子)
- 4 『月水奇縁』(馬琴 文化二・一 仇討もの)
○『風流曲三味線』(浮世草子 前出)・『棠大門屋敷』卷五一(浮世草子)・『津国女夫池』第三(浄瑠璃本)
- 5 『稚枝鳩』(馬琴 文化二・一 仇討もの)
○『石点頭』十一「江都市孝婦屠身」・十二「侯官県烈女殲仇」(中国白話小説、唐本)・『小説粹言』卷四「包竜

図智賺合同文」(同、和刻本)

6 『石言遺響』(馬琴 文化二・一 伝説もの)

○『小夜中山靈鐘記』(勸化本)

7 『四天王剽盜異録』(馬琴 文化三・一 一代記もの)

○『前太平記』(近世軍記)・『杜騙新書』(中国小説、和刻本)

8 『桜姫全伝曙草紙』(京伝 文化二・一二 一代記もの)

○『勸善桜姫伝』(勸化本)・『苺萱道心行状記』(同)・『弥陀次郎発心伝』(同)・『小夜中山靈鐘記』(同 前出)・

『隅田川鏡池伝』(同)・『伊達競阿国戯場』(浄瑠璃本)・『苺萱桑門筑紫轢』(同)・『通俗金翹伝』(中国白話小説、通俗本)・『通俗醉菩提全伝』(同)・『二人比丘尼』(仮名草子)・『死靈解脱物語聞書』(仮名草子、勸化本)

9 『勸善常世物語』(馬琴 文化三・一 伝説もの)

○『鉢の木』(謡曲)・『北條時頼記』(近世軍記)・『四谷雑談集』(実録)

10 『三國一夜物語』(馬琴 文化三・一 伝説もの)

○『富士太鼓』(謡曲)

11 『善知安方忠義伝』(京伝 文化三・一二 (原 史伝もの)

○『善知鳥』(謡曲)・『前太平記』(近世軍記 前出)

12 『昔話稲妻表紙』(京伝 文化三・一二 お家もの)

○『伊達競阿国戯場』(浄瑠璃本 前出)・『伽羅先代萩』(同)・『傾城反魂香』(同)・『参会名護屋』(歌舞伎根本)

13 『椿説弓張月』前篇(馬琴 文化四・一 史伝もの)

○「海人」(謡曲)・『参考保元物語』(軍記)・『和漢三才図会』(事典)

14 『墨田川梅柳新書』(馬琴 文化四・一 伝説もの)

○「隅田川鏡池伝」(勸化本 前出)・『梅若丸一代記(都鳥妻恋笛)』(浮世草子)〈

15 『そのゆき』(馬琴 文化四・一 伝説もの)

○「通俗金翹伝」(通俗本 前出)

16 『新累解脱物語』(馬琴 文化四・一 一代記もの)

○「死霊解脱物語聞書」(仮名草子、勸化本 前出)・『伊達競阿国戯場』(浄瑠璃本)・『祐天上人一代記』(絵本もの)・読本、勸化本)・『近世奇跡考』(考証隨筆)・『通俗忠義水滸伝』卷之十二・十三(通俗本 前出)・『通俗醉菩提全伝』(同 前出)

17 『敵討裏見葛葉』(馬琴 文化四・一 伝説もの)

○「泉州信田白狐伝」(勸化本)・『芦屋道満大内鑑』(浄瑠璃本)・『前太平記』(近世軍記 前出)

18 『梅花水裂』(京伝 文化四・二 (原) 巷談もの)

○「茜染野中の隠井」(浄瑠璃本)・『傾城阿波の鳴門』(同)・『世間御旗本形氣』(実録)

II 〈中本もの〉読本

19 『高尾船字文』(馬琴 寛政八・一序)

○巷談〈伊達騒動〉(『仙台萩』(実録)・『伊達競阿国戯場』(浄瑠璃本 前出)等)・『通俗忠義水滸伝』(通俗本 前出)・『焚淑録』(中国小説)・『小説奇言』卷三「滕大尹鬼断家私」(中国白話小説、和刻本)

20 『小説比翼文』(馬琴 享和四(文化元)・一)

○江戸巷談〈白井権八譚〉(実録、浄瑠璃、『敵討連理橋』(中本もの)読本)・『風流曲三味線』(浮世草子 前出)・

『西山物語』(初期読本)・『小説精言』巻二「喬太守乱点鴛鴦譜」(中国白話小説、和刻本)

21 『曲亭伝奇花钿児』(馬琴 享和四(文化元)・一 翻案もの)

○『玉搔頭伝奇』(中国戯曲)・『津国女夫池』(浄瑠璃本 前出)

22 『敵討誰也行燈』(馬琴 文化三・一 一代記もの)

○江戸巷談〈佐野次・八橋譚〉(演劇、実録、『近世江都著聞集』(巷説集))

23 『盆石皿山記』(馬琴 前編文化三・一、後編文化四・一 伝説もの)

○巷談〈皿々山譚〉・〈皿屋敷譚〉・〈苺萱譚〉(『苺萱桑門筑紫轢』(浄瑠璃本) 前出)

24 『苺萱後伝玉櫛笥』(馬琴 文化四・一 伝説もの(翻案もの))

○『石点頭』一「郭挺之榜前認子」(中国白話小説、唐本 前出)・〈苺萱譚〉(『苺萱道心行状記』(勸化本 前出)・

『苺萱桑門筑紫轢』(浄瑠璃本 前出))・『東鑑』(史書)

25 『巷談坡陞庵』(馬琴 文化五・一 一代記もの)

○江戸巷談〈薄雲譚〉(『近世江都著聞集』(巷説集 前出))・『近世奇跡考』(考証隨筆 前出)・「耳の垢取り長官

(考証隨筆『骨董集』所収以前の草稿)」(同)

26 『敵討枕石夜話』(馬琴 文化五・一 伝説もの)

○江戸巷談(一ッ家(石枕)譚)

III 〈絵本もの〉読本

27 『新編水滸画伝』(馬琴・北斎 初編初帙文化二・九、初編後帙文化四・一)

○『通俗忠義水滸伝』(中国白話小説、通俗本 前出)・『忠義水滸伝』第一〜十回(同、和刻本 前出)

二

一覽表について、まずII〈中本もの〉読本から見ていきたい。IIは全部で八作あり、すべて馬琴の作である。そのうち25・26は文化五年(一八〇八)の刊行だが、これは、八作中最も遅い26の序文年次から、「馬琴が中本を執筆したのは文化三年の秋まで」と指摘された高木元氏⁽²⁾に従い、翌文化四年の刊行を予定していたのが、版元の事情で一年延期されたものと見て、文化四年刊の作品に準じて並べておいた。

19〜26を通覧して気づく点は、馬琴の〈中本もの〉が、ほぼふたつの方向を示していることである。ひとつは、19・20・22・23・25・26に見られるように、街談巷説を素材としていること。しかも、20・22・25・26は、はっきりと江戸の巷談が素材である。

19は、周知のように〈伊達騒動〉が素材であり、それ自体は江戸に限定されるものではないが、とりわけ歌舞伎、浄瑠璃共に江戸で初演された『伊達競阿国戯場』(歌舞伎・安永七年〈一七七八〉、浄瑠璃・同八年)が意識されているとすれば、これも同じグループに加えて良いことになる。

23は、素材は巷談(〈皿々山(紅皿欠皿)〉〈皿屋敷〉)ではあるが、必ずしも江戸に限定されない。文体的には、中本の特徴の一つである口語使用が目立つ⁽³⁾けれども、前後編各二冊から成り、「馬琴の中本型読本では最も大部の作品⁽⁴⁾

である。本作は〈稗史もの〉の方向に一步踏み出した中本⁽⁵⁾と言って良く、馬琴が『江戸作者部類』に「文化年間細本^{カシモト}銭なる書賈の、作者に乞ふてよみ本を中本にしたるもあれど、そは小霎^{シヤバシ}時の程にして皆半紙本になりたる也⁽⁶⁾」という一例かもしれない。

もうひとつは、21・24で、21は中国戯曲、24は中国短編白話小説の丸ごとの翻案である。24は、〈稗史もの〉読本に準じた〈読本的枠組〉を持ち、〈伝説もの〉と分類できるが、その一方で原話の輪郭をそのまま話の大枠としており、〈読本的枠組〉形成以降の馬琴の〈中本もの〉としては特異な作といえよう⁽⁷⁾。典拠の全体を翻案するというやり方は、草双紙同様、江戸の中本が本来持っている属性ではなからうか。

Ⅲ〈絵本もの〉読本として、『新編水滸画伝』一作を別立てした。『水滸伝』の絵入り翻訳というスタイルは、要するに「絵本水滸伝」と言って良く、上方〈絵本もの〉の流れを意識した時に、違和感なく了解することができる。初印本の刊記には「大坂・勝尾屋六兵衛／江戸・前川弥兵衛／江戸・角丸屋甚助」が連記されるが、角丸屋は上方風を取り入れるのに積極的な書肆であり、勝尾屋の名は、〈絵本もの〉の刊記にしばしば見えている。

三

一覧表Ⅰに戻り、京伝・馬琴の〈稗史もの〉一八作について検討するが、これらには、1〜5と6以降で、一線を引くことが可能である。1〜4については、〈読本的枠組〉の形成という観点から、従来すでに再三にわたって私見を述べて来ているので、ここでは繰り返さない。5『稚枝鳩』については、前半の〈読本的枠組〉の置き方に3『優曇華物語』の影響が露わに見られるが、後半は中国白話小説のかなり直接的な翻案⁽⁸⁾を繋げた構成になっている。「Ⅱ

〈中本もの〉読本」に挙げた24『苺萱後伝玉櫛笥』が、『稚枝鳩』と同じ典拠（『石點頭』）に含まれる別の短編を、〈中本もの〉に仕立てたものであるところからすると、『稚枝鳩』も元来は後半のみ〈中本もの〉として構想されており、それに〈読本的枠組〉を付加することで、〈稗史もの（仇討もの）〉としての構成を整えたのかもしれない。

続いて6、18を扱う。この一三点は、ほとんどが文化三、四年に刊行されたものである。一覽表の書名に、囲みや網掛けをしてあるのは、そのことと関わっているが、順次説明して行きたい。6『石言遺響』は、序文年次から言うところ5『稚枝鳩』よりやや早く（『稚枝鳩』が文化元年八月、『石言遺響』が同年五月）、内題に「繡像復讐石言遺響」とあるので、迂闊にも〈仇討もの〉と思ひ込んでいたが、最近になって、馬琴〈伝説もの〉読本の初作と見なすべきものであることに気づいた。従来、主として文化三、四年刊の馬琴読本を中心に、良く知られた口碑伝承を素材とする〈稗史もの〉・〈中本もの〉を〈伝説もの〉と下位分類しているが、素材のみによる判断では〈型〉の認識を過つことも多いので、〈伝説もの〉について改めて定義づけおくと、素材となる口碑伝承を、それとは全く異なる虚構・伝承・歴史的事実などと結びつけて〈読本的枠組〉で繋ぎ、親子三代、またはそれ以上の長いスパンで、両者の因縁を語って行く〈型〉、ということになる。この定義に即して説明すると、『石言遺響』は、遠州小夜中山の無間の鐘・夜泣き石をめぐる伝説を踏まえ、菊川で刑死した日野俊基・藤原宗行の怨恨とその慰撫を〈読本的枠組〉として、父俊基鎮魂のための鐘鑄を実現しようとする月小夜姫の志を全編の柱としている。しかし月小夜は途中で病死し、志は子供の世代に引き継がれる。その後娘小石媛が盗賊に殺され、クライマックスにはその妻敵討が置かれているが、娘の死は鐘鑄成就のきっかけとして機能している。

『石言遺響』の〈読本的枠組〉としての俊基・宗行の怨霊に、もう少しこだわってみる。二人は共に朝廷への忠義を認められず、俊基は怪鳥刃の雉子となって良民を苦しめ、日野良政に退治されて月小夜を世に出す。一方宗行は悪

女に転生して障碍をなすと語るが、展開の後半（巻之四・第七編）に至って、その実体がやや具体的に示される。

宗行卿の冤恨、女人に生を引て障碍をなさんといへりしが、果してこの言たがはず、先帝醍醐は准后子廉の讒言を信じ、大塔宮を害し給ひてより天下ふたゝび乱れ、義貞の中将は勾当の内侍の色に耽り、軍議に怠りて遂に越前の足羽に陣没す。或は師直が塩冶の妻を挑み、或は良政の万字前をあひし給ふなど、枚挙に遑あらず。

その最後に、良政が万字前を愛したこと（傍線部）、というのが付け加えられている。実際、『石言遺響』の文芸的内実の中核部分をなしているのは、日野三位良政卿をめぐる万字前と月小夜との葛藤なのである。万字前は、自害に際して、「後醍醐帝への味方を拒否して俊基に殺された塩飽勝重の娘で、そのために月小夜を憎んだこと」（『日本古典文学大辞典』「石言遺響」の項、内田保広氏執筆）を語る（巻之五・第九編）。敵密に言えば、その万字前が宗行の生まれ変わりだとすると、俊基・宗行も、冒頭の友好関係が敵対関係に変じてしまい、矛盾が生じるのだが、これは、典拠『小夜中山霊鐘記』（寛延元年（一七四八）刊）に引きずられた結果である。『石言遺響』は、全編にわたって『小夜中山霊鐘記』に依拠しており、『石言遺響』の悪女万字前も、『小夜中山霊鐘記』の万寿前を踏まえて形象されたものであることは、周知のとおりである。

ところで、『石言遺響』の万字前の形象が、さらに京伝の『桜姫全伝曙草紙』（一覽表8）の、桜姫の母野分方に引き継がれたことは、早く山口剛氏が名著全集『読本集』解説（昭和二年（一九二七））に指摘され、私もこれを追認しているが、その際に、『石言遺響』の万字前と『曙草紙』の野分方の並々でない影響関係を再確認しながら、結論としては、馬琴が京伝に先んじたことを強調するに止まっている。しかし近年に至り、私は、文化四年以前刊行の読本諸作については、京伝・馬琴は兄弟作者という前提で考えるようになっており、『石言遺響』・『曙草紙』の悪女の形象の類似についても、その背後に、両者の談合の反映を想定している。以下そのことを申し述べてみたい。

『石言遺響』の典拠である長編勸化本『小夜中山霊鐘記』の主題について、中村幸彦氏は、『日本古典文学大辞典』の項目に、「生別流転、恩愛執着、殊に女性の罪障深い性を、浄土宗の立場で説いたもの」とまとめられた。『小夜中山霊鐘記』には「女性の罪障深い性」が、四つのエピソードに配分されていて、そのために「複雑でまとまりの悪い筋」（中村氏）になっているのを、馬琴は全て拾い上げ、〈稗史もの〉読本として再構成したのである。その際、原拠のテーマであった「女性の罪障深い性」は、『石言遺響』では、万字前の形象に特化され、それがほぼそのままの状態で『曙草紙』に入った。万寿前―万字前―野分方の共通項は、〈妬婦〉であることである。田中則雄氏の一連のご研究⁽¹⁴⁾によれば、万寿前の妬心が仏力によって救われる点に勸化本としての特徴があり、それを受けて、万字前は罪障を懺悔して自害するのだが、野分方は、それすらせずに雷死する。

思い切つてやや飛躍して言うと、『小夜中山霊鐘記』をはじめ、長編勸化本等にしばしば見られる〈妬婦〉像の、〈稗史もの〉読本における形象化は、一覽表1―5で〈読本的枠組〉の形成・運用に成功した後の、京伝・馬琴の共通テーマ、とりわけ京伝の主導するテーマだったように思われる。『石言遺響』の万字前の形象は、同時期に『曙草紙』を構想しながら『小夜中山霊鐘記』を読過していた京伝との談合に基づいたものではなからうか。というのは、以前にも、馬琴は、京伝と非常によく似た構成・素材で読本をものしているからである。典型的なのは、19『高尾船字文』（馬琴）と1『忠臣水滸伝』（京伝）の関係であり、これは馬琴が、談合の上、京伝の抱いていた構想のパイロット役をつとめたものとする、最も説明がつき易いように思う⁽¹⁵⁾。また、『優曇華物語』（京伝）と4『月水奇縁』（馬琴）の間にも、これと同様の関係を想定することが可能である⁽¹⁶⁾。馬琴パイロット説を具体的に証明できる資料はなく、現在残る馬琴の証言には、逆のニュアンスがあるが、この関係は、『石言遺響』と『曙草紙』の間にも当てはめて良いものと思われる。

しかし両者は、『石言遺響』が、いわば単一の長編勸化本の内容の組み替えによって成り立っているのに対し、『桜姫全伝曙草紙』では、複数の典拠が、重層的に組み合わされている。一覧表8に挙げたのは、先にも述べたように、主題・構成・趣向の核となるもの（この中には、必ずしも表現の表層に出て来ないものを含めてある）であって、細部にわたるものを加えれば、この倍くらいに膨れ上がるであろう。そして、これら主要典拠、及びこれらを踏まえた『曙草紙』の構成・趣向には、文化三、四年刊の馬琴読本における典拠・構成・趣向と共通する点が少なくないのである。一覧表のうち、タイトルを四角カッコで括ったものがそれにあたる。それらを、順次見てゆきたい。

7 『四天王剽盜異録』は、全体が、長編勸化本の『中将姫一代記』（寛政一三（享和元）年（一八一〇）刊）・『小野小町一代記』（享和二年刊）に通う女性の往生伝として構成されており、『弥陀次郎発心伝』（明和二年（一七六五）刊）の主人公を〈読本的枠組〉とする『曙草紙』と同じく、〈一代記もの〉として分類することが可能である。

9 『勸善常世物語』については、卷之三談第五に、病気で醜くなった妻を疎む夫が、他家の娘に恋慕し、銀の釵かんざしを仲立ちとして対面する場面があり、『馬琴中編読本集成4』解題（五〇二頁）に、これは『曙草紙』と同じく、『通俗金翹伝』（宝暦一三年（一七六三）刊）による趣向である旨の指摘がある。

10 『三国一夜物語』では、主人公の敵が赤間が関の遊女と合奏して恋となるが、傍輩との争いを引き起こす。これも『勸善常世物語』と同じく、『曙草紙』を意識した『通俗金翹伝』からの趣向と考えたいと思う。

飛んで15『その、ゆき』も、かなり露わに『通俗金翹伝』を踏まえており、自序にも断っている（事は彼翠翹かみざしが小説にすこしく似て、その趣大おほいに同じからず）ことが、『集成5』解題（六七〇頁）にも指摘されている。

14 『墨田川梅柳新書』は、単純に勸化本の利用という意味で四角カッコを付したが、『隅田川鏡池伝』は、内容的にも『曙草紙』に通う点が大きい。この点については後述したい。

16 『新累解脱物語』は、典拠・構成とも、『曙草紙』に近いところにある。勸化本『祐天上人一代記』に対応する作であることは、中村幸彦氏のご指摘⁽¹⁷⁾以来、周知のことだが、浄瑠璃本『伊達競阿国戯場』の利用を京伝の12『昔話稲妻表紙』と分け合っていることについて、最近指摘する機会があった。⁽¹⁸⁾『伊達競阿国戯場』の高尾の怨霊は、『曙草紙』の玉琴の怨霊の原拠とも見られ、祐天の累済度を扱った『死霊解脱物語聞書』も、累／助⁽¹⁹⁾という怨霊の重なりが、清玄の背後にいる玉琴の怨霊という着想を生んでいると思う。また、中国宋代の奇僧⁽²⁰⁾濟顛和尚の一代記『通俗醉菩提全伝』は、祐天（烏有）和尚の視点から成る『新累解脱物語』の一代記構想を支えるものとなっている。

17 『敵討裏見葛葉』は、『曙草紙』と同じく勸化本を踏まえていると言いたいところだが、もうひとつ確証に欠けるところがある。一応四角カッコとしておく。

一 覧表「Ⅱへ中本もの読本」の24『荊萱後伝玉櫛笥』の典拠『荊萱道心行状記』⁽²⁰⁾が、『曙草紙』にも使用されたことは、すでに知られるが、内容の上でも少なからず『曙草紙』を意識している旨、別に論ずる機会を得た。⁽²²⁾

四

以上、『敵討裏見葛葉』を保留として、文化三、四年刊の馬琴読本には、長編勸化本・通俗本・浄瑠璃本を中心的な典拠作として、『曙草紙』との構成・趣向の共有が目立つことを指摘したが、加えて、その扱っているテーマにもある偏りが見られる。それは、『小夜中山霊鐘記』について中村幸彦氏の言われた「女性の罪障深い性」と、その女性の怨念を済度する仏力の大きさ、に集中している。

「女性の罪障深い性」が、文化三、四年刊の馬琴読本にどれだけ描かれたか、拾い上げてみることにする。先に

『石言遺響』に即して触れた〈妬婦〉像が、その中心的な描かれ方であるが、ここから、子供への盲目的な愛情、それと裏腹な継子への残虐さ、さらには物欲のすさまじさ等へと発展している。網掛けを施した馬琴読本、9・10・14・15・16・23・25・26には、〈稗史もの〉・〈中本もの〉を含め、こうした〈妬婦〉のモチーフに基づく様々なヴァリエーションが展開されている。

しかし、「女性の罪障深い性」と、そこからの済度というテーマが、圧倒的な迫力をもって、典型的に作品化されたのは、『桜姫全伝曙草紙』を措いて、他にはない。使用された勸化本・通俗本のはほとんどは、京伝によって、このテーマに沿って受容・咀嚼され、稀代の悪女野分方に血肉化されている。14『墨田川梅柳新書』に触れた際に言及を保留した『隅田川鏡池伝』は、冒頭に、奥州両国の国司に任ぜられて彼の地に赴こうとする「吉田ノ少将維房」の前に饒別に現れた「北ノ方ノ御兄小川兵衛尉」が、

○ 扱モ貴卿ノ北ノ方ハ某ガ妹ナガラ、以ノ外ニ心邪ニシテ、妬毒アル女ニテ侍レバ、：

○ 扱ハ心直カラヌ者ニテ候ヘバ、年タケ候程物嫉ナド仕ツラバ、：

と語ることに始まって、〈妬婦〉のモチーフが大きく提示された作であり、必ずや野分像形成の糧となったものと考えられる。

ただし、これも中村幸彦氏⁽²³⁾以来、『曙草紙』の主要典拠とされる『勸善桜姫伝』のテーマは、田中則雄氏の指摘されるように、⁽²⁴⁾追いつめられて行く人間(男性)の憤怒(と救済)であって、女性の嫉妬ではない。京伝はこの点を意識し、表向き『勸善桜姫伝』によりながら、テーマを変更したのだと考えられる。

『曙草紙』で、「女性の罪障深い性」は、野分方にのみ形象化されているわけではなく、惨殺された玉琴の怨恨もまた、〈妬婦〉のモチーフを担っている。その典拠は、これも表面化は避けられているが、浄瑠璃本『伊達競阿国戯場』

(及び『死霊解脱物語聞書』)が想定される。⁽²⁵⁾ もうひとつ、『曙草紙』の後半には、『二人比丘尼』を典拠として、玉琴と同様に野分の嫉妬による、小萩の殺害が置かれている。これを娘松虫・鈴虫の出家の機縁としたのは、ここに復讐とは異なる女人救済の道を見出した、作者の配慮であろう。

ここまで、『曙草紙』と馬琴読本との関係に限って述べてきたが、文化三、四年刊行の京伝読本のうち、12『昔話稲妻表紙』は、作品の直接的テーマとしては異なるけれども、典拠とモチーフに大いに通う点があり、18『梅花水裂』には、明確に〈妬婦〉のモチーフの展開が見られる。⁽²⁶⁾

以上、文化三、四年に刊行された京伝、馬琴の読本の中心には『桜姫全伝曙草紙』があるということを示し述べてきた。その上で、もう一度一覧表を眺めると、これまで全く触れて来なかったのは、11『善知安方忠義伝』と13『椿説弓張月』の両作のみである。このふたつは、〈稗史もの〉読本全体の流れから言っても、〈史伝もの〉の嚆矢に位置する作品であるが、この段階では、馬琴の『弓張月』(前篇)は、典拠・構成の基本的なあり方において、京伝の『善知安方忠義伝』と同じ方向を向いており、文化三、四年における京伝・馬琴の位置関係を踏み越えたものではないと言えるであろう。

最後に、再び飛躍した物言いを許していただければ、一覧表に挙がっている典拠作の多くは、広義の〈よみほん〉であり、京伝・馬琴にとっては、1『忠臣水滸伝』、ないし19『高尾船字文』以来、新しい長編娯楽読み物(〈稗史もの〉読本)の創出に向けた試行錯誤の過程における、必読資料だったのではなからうか。そして『曙草紙』は、二人の目指してきた〈稗史もの〉読本の、最初の達成と称しても良い作品だったと思われる。その文芸性が並々でない高さには達していることは、先学の様々な指摘に加え、以上の迂遠な説明からでも、容易に浮かび上がって来るものと思う。その一端に、『曙草紙』・『善知安方忠義伝』・『昔話稲妻表紙』に共通して、人間において善悪は一如であると

する、京伝の〈勧善懲悪〉観がある。⁽²⁸⁾ところが、馬琴は、あれほど京伝に追随しながら、〈勧善懲悪〉の施し方においては『優曇華物語』以来の〈善人／悪人〉型にこだわらず、文化三、四年においても京伝方式を採用することはなかった。ただし、馬琴が〈稗史もの〉読本の序跋等において、〈善人／悪人〉型の〈勧善懲悪〉観に加え、典拠として、広義の〈よみほん〉ではなく〈正史・実録〉を直接踏まえることの必要性を、声高に唱えるようになったのは、翌文化五年あたりからのことである。馬琴が〈稗史もの〉のリーダーと目されるようになるのはここからで、〈稗史もの〉読本の形成史としては、文化五年以降を第二期と称して良いのではないかと思われる。

〔注〕

(1) 以下の四点がそれに当たる。

- ① 『四天王剽盜異録』と『善知安方忠義伝』、「国文学研究資料館研究紀要」30、平成一六△二〇〇四△・二。
 - ② 『昔話稲妻表紙』と『新累解脱物語』、「日本文学」、平成一八△二〇〇六△・一。
 - ③ 「京伝、馬琴と〈勧善懲悪〉」、「国語と国文学」、平成一八△二〇〇六△・五。
 - ④ 「馬琴流〈勧善懲悪〉の言表と「誤読」の問題」、「江戸文学」36、平成一九△二〇〇七△・六
- (2) 前掲書第二章「中本型の江戸読本」、一四一頁、一九四頁
 - (3) 中村幸彦「人情本と中本型読本」(昭和三一△一九五六△・三初出、著述集五所収。本作における口語使用の具体例は、(1)④拙稿注(15)に抜き出した。
 - (4) 高木氏著書、一三四頁。
 - (5) 17『敵討裏見葛葉』は本作と反対の特徴を持つが、これについては(1)④拙稿で触れている。
 - (6) 木村三四吾氏私家版、一二七頁。
 - (7) 本作はまた、23『盆石皿山記』と同様、〈稗史もの〉に通う内実を持つ。(1)④拙稿において、やや詳細に論じている。
 - (8) 拙稿『優曇華物語』と『月水奇縁』—江戸読本形成期における京伝、馬琴—、「読本研究」初輯、昭和六二△一九八七△・

四等。

- (9) 徳田武『^{復讐}奇談稚枝鳩』と『石點頭』(『日本近世小説と中国小説』、昭和六二(一九八七)所収)。
- (10) 横山邦治『読本の研究』、昭和四九(一九七四)。
- (11) 後藤丹治『太平記の研究』(昭和二三(一九三八)後編第三章第一節)。
- (12) 『優曇華物語』と『曙草紙』の間—京伝と馬琴—、「読本研究」第二輯上套、昭和六三(一九八八)・六。
- (13) (1)①④拙稿参照。
- (14) 「仏教長編説話と読本」、『国語国文』、二〇〇四・七など。
- (15) このことについては、(1)①②④拙稿でも触れている。
- (16) (8)拙稿。
- (17) 「読本展回史の一齣」、昭和三三(一九五八)・一〇初出、著述集五所収)等。
- (18) (1)②拙稿。
- (19) これに、さらに浄瑠璃本『苺萱桑門筑紫轢』初段、(蛇髪の妬婦)のイメージ(堤邦彦『女人蛇体—偏愛の江戸怪談史』、角川選書33、平成一八(二〇〇六)を付加すべきであろう。(1)④拙稿において述べた。
- (20) 中村幸彦「読本発生に関する諸問題」、昭和二三(一九四八)・九、著述集五所収。
- (21) 土屋順子「読本にみる勸化本の受容—『苺萱後伝玉櫛笥』と『桜姫全伝曙草紙』、「大妻国文」22、平成三(一九九一)・三。
- (22) (1)④拙稿。
- (23) 「桜姫伝と曙草紙」、初出昭和一二(一九三七)・八、著述集六所収。
- (24) 「文学史の中の大江文坡」、「文学」、平成一四(二〇〇二)・五、六。
- (25) ここにも、(19)にあげた『苺萱桑門筑紫轢』初段を補っておきたい。(1)④拙稿)。
- (26) 拙稿『梅花水裂』の意義」、「読本研究」第七輯上套、平成五(一九九三)・九。
- (27) (1)①拙稿、及び拙稿『椿説弓張月』の構想と謡曲「海人」、『近世文芸』79、平成一六(二〇〇四)・一。
- (28) (1)③拙稿。